

『三国史記』新羅関係記事の検討

高 寛 敏

はじめに

第I章 『国史』と『新国史』

第II章 倭人・倭兵関係記事

第III章 新羅の小国統合記事

第IV章 新羅の対高句麗記事

おわりに

キーワード：『国史』、『新国史』、朴昔金三姓交立、『広開土王碑』、居柒山国

はじめに

『三国史記』（以下、『史記』）は朝鮮三国時代史研究の現存最古の基本文献である。紀元前1世紀から7世紀末の高句麗・百済・新羅の三国時代と、10世紀前半までの後期新羅時代の歴史が叙述されている。しかしその編纂年は高麗時代の1145年と遅れたので、どのような史料を用いたか、またどこまで史実を伝えているかが問題となる。筆者はこの問題を追及して、以前に『『三国史記』の原典的研究』¹を公刊して、一歩を進めた。その後の筆者のさらなる研究によると、新羅関係記事には意識的に年次を調節したり、造作したものが多く、それは三国史全般に影響を与えているので、その再検討は『史記』研究を深化する可能性があると思われる。以下に述べる次第である。

第I章 『国史』と『新国史』

新羅の史書編纂について伝えたのは、600年の真興王紀六年秋七月条に記された、異斯夫らの次の上奏文である。

伊滄異斯夫奏曰、国史者、記君臣之善惡、示褒貶於万代、不有修撰、後代何覩。王深然之。命大阿滄巨柒夫等、広集文士、俾之修撰。

これは人名表記から、『国史』編纂の上奏文を参考にした文である。しかし「伊滄」・「大阿滄」は当初の表記ではない。「滄」は真興王代の『丹陽赤城碑』には「干支」、『真興王巡狩碑』では「干」であって、「滄」は6世紀の史料には見いだされない。実例としては、『日本書紀』の新羅使節史料であるが、647年（孝徳三年）の大阿滄、649年（孝徳五年）の沙滄、655年（斉明元年）の及滄、668年（天智七年）の級滄、682年（天武十年）の一吉滄などである。「滄」は7世紀中葉以後の用字であることが確実である。

その後、筆者は「新羅の建国神話と初期王統譜」²で、各記事、とくに初期記事は、後期新羅時代以後のことを繰り上げたものや、内容的にも史実でないものが少なくないことを指摘した。例えば、第3代儒理尼師今九年春条に、六部の姓を李崔孫鄭裴薛と定め、官十七等を伊伐

¹ 雄山閣、1996年。

² 『東アジア研究』40、2005年。

滄、伊尺滄などと定めたところがあるが、六部姓については、中国の大姓を念頭において、新羅末から高麗初にかけて付されたもので、『旧三国史』を参考にしたことが確かであり³、官十七等記事は「滄」字で明らかのように、7世紀中葉以後の事である。第5代婆娑尼師今二十三年秋八条に、音汁伐国と悉直国が国境問題で争ったが、尼師今は「金官国首露王」に依頼して紛争を解決したとあるのは、7世紀に「金官国」出身の金庾信の妹が武烈王と結婚し、その子が文武王となり、金庾信が英雄的な働きで新羅の国難を解決した事実から、創作されたものである。このことからすると、『国史』は新羅本紀の基本的原典ではなく、建国神話と以下の王統譜を最初に定めたもので、具体的な記事は少なかった史書であったと考えられる。後期になって、『国史』の人名表記を生かしながら、改変・延長した『新国書』とも称すべき史書があって、それが基本原典になったと判断せざるを得ない。最初に筆者が『国史』が基本原典として採用されたと考えたのは、地理志末尾の「三国未詳地分」の分析に問題があったからである。「地分」は、『史記』編者が参考にした史料のなかで、すでに位置不明の地名を、特殊地分を一括して挙げたのち、基本原典から新羅・高句麗・百済の順に年代を追って摘記したもので、基本原典に欠ける時代は補助原典から摘記した。新羅最初の「地分」は97慰礼城であるが、それは百済最初の「地分」で、実は151蛙山城が最初で、次に123多伐国とならなければならない。この混乱の原因について、慰礼城は単なるミスで、多伐国・蛙山城は不注意で落とした『国史』の「地分」を追記したものと判断したが、それは『新国史』からの摘記の際の混乱とみなければならない。前著では『新国史』は文武王

代に完成したように述べたが、完成したのは次代の神文王代と思われる。なぜなら、『新国史』は「三韓一統」を遂げた文武王代史が前提となり、神文王代に官僚制・地方統治制度・祭祀制など、国家統治体制が一応の完成をみたので、この時期こそ『新国史』が要求されたに違いないからである。

初期記事の信じがたいことは、新羅に5世紀まで隣接して存在していた釜山東萊の居柴山国が、居道伝によると、早く第四代脱解尼師今代に併合したとあるが、この年次繰り上げと関連して、当時としては考えられない記事が見れることになった。

脱解尼師今二十一年秋八月条に、「阿滄吉門与加耶兵、戰於黄山津口、獲一千級、以吉門為波珍滄、賞功也」とあるが、「滄」字が後世の表記であるばかりか、釜山東萊居柴山国を飛び越して、洛東江に違いない黄山津で加耶と戦ったというのである。それはその前の居柴山国併合記事を前提にしたもので、事実とは認めがたい。拙稿「古代朝鮮、〈加耶〉・〈任那〉の実体」⁴で論じたように、「加耶」にも問題がある。当代史料である412年『広開土王碑』の「任那加羅」、『宋書』夷蛮伝・倭国条・文帝二十八年（451年）倭王斉隆正称号中の「加羅」、『日本書紀』神功紀と継体・欽明紀の「加羅」・「南加羅」とあって、当代史料には「加耶」はない。『史記』楽志・加耶琴条引用『羅古記』には、加耶国嘉実王が省熱県人于勒に命じて十二曲を製したが、その中には「上加羅都」・「下加羅都」の曲名がみえる。「加耶国」以外は、みな「加羅」である。「加耶」の確実な例は、7世紀後半に建立されたとされる金庾信伝所引『庾信碑』の「南加耶」である。次は庾信玄孫長清作『行録』の節略記事である金庾信伝の「号曰加耶、後改為金官国」

³ 武田幸男「朝鮮の姓氏」、井上光貞『東アジア世界における日本古代史講座』学生社、1984年。

⁴ 『朝鮮大学校学報』25、2015年。

である。法興王十九年条の、「金官国主金仇亥」以下の「金官国」降伏記事は、この『行録』からの引用文である。このように、5・6世紀の信頼すべき史料は、みな「加羅」であって、「加耶」は7世紀後半になって用いられた。楽志の「加耶」は曲名からも分かるように、本来は「加羅」であって、「加耶琴」も「加羅琴」であったのである。于勒は6世紀に新羅に亡命して真興王に仕えた。真興王紀十二年条には、「加耶国嘉悉王」、「其樂名加耶琴」とあるが、それは『新国史』の時には、「加羅」が「加耶」とされ、琴も「加耶琴」と呼ばれるようになったからである。新羅本紀には初期から「加耶」が頻出するが、それはみな『新国史』に基づいたからである。加耶琴は新羅から日本に輸出されたので、日本では新羅琴と呼ばれた。

6世紀には金海勢力は南加羅と称され、532年に新羅に併合された。その「南加羅」を「金官国」と称したのは、『行録』である。その契機は文武王紀二十年条に、「加耶郡置金官小京」にある。南加羅は『新国史』の頃に加耶郡、さらに680年に「金官小京」とされた。そこから「金官国」が案出されたと思われるのである。

『新国史』の最大の眼目は、朴昔金の三姓交立王統を創出することであった。新羅王として最初に確認されるのは奈勿である。新羅は『資治通鑑』晋紀太元二年条「春、高句麗・新羅・西南夷、皆遣使入貢于秦」、『太平御覽』卷七百八十一・四夷部二・東夷二・新羅で引用した『秦書』の逸文「符堅建元十八年、新羅国王楼寒、遣使衛頭献美女」によると、377年と382年に前秦に朝貢している。この両度の朝貢の主体は奈勿であって、「楼寒」は「麻立干」の対訳である。『三国遺事』（以下、『遺事』）は『太平御覽』の「楼寒」を正しく解釈して「奈勿麻立干」としたのに対し、『史記』は381年の奈勿尼師今二十六年条に『太平御覽』を引用しているが、『新国史』を継承して「奈勿尼師今」と

した。『新国史』は智証麻立干四年に正式に国号を「新羅」と定めたとあることに注目し、その時から王号を「麻立干」としたと推定される。新羅王統は奈勿以下は金氏王統であることが明白であるが、それ以前に易姓革命なくして、朴昔姓王統が先行したという『史記』王統譜は、『国史』以後にある政治的目的をもって造作されたことが想定され、それこそ『新国史』なのである。その政治的目的とは、近親婚で継承された王統が修正を迫られた時、具体的には、武烈王が「金官国」後裔の金庾信（新金氏）の妹と結婚して、次代の文武王を生んだこと、近親婚が通じない唐の助けを得るため、唐化政策を強力に推進したことにある。そこで少なくとも6・7世紀の王妃が他姓（朴氏）であることが要求されたのである。

『国史』は一貫した金氏王統を伝えていたはずであるが、『史記』では卵として沙梁部の蘿井（奈乙）に天降した朴赫居世干が始祖王になっている。卵生天降の人物が始祖王になるというのは、建国神話の常識ではあり得ないことであって、始祖王は日神と水神との聖婚によって誕生するというのが、本来の姿である。「赫」は「日」と同義語で、「朴」も訓で「光明」・「日」で、そこから朴姓が案出されたのである。朴居世干は始祖王ではなく、高句麗始祖神解慕漱にならい、始祖神は「赫慕漱」とでもされ、その日神は沙梁部の閼英井から出現した女性（水神女）と聖婚し、子の南解を残して昇天し、南解が始祖王になったというのが、『国史』の建国譚であったと思われる。

南解の称号は「次次雄」とされているが、本来の称号は「居世干」であった。第2代は南解の子儒理尼師今で、その称号は「次次雄」とされるところであるが、そうはなっていない。それについては、第3代が脱解尼師今となっていることに関連すると思われる。脱解は遠国から渡来した人物で、朴氏ではなく、昔氏であると

されている。最初は金官国に着いたが、受け入れられなかったので、「始祖赫居世在位三十九年」に辰韓に漂着し、「南解王五年」にその婿になった。即位したのは62歳で、在位24年である。享年は86歳で不自然な感がある。「金官国」云々も、それが『新国史』の造作文で、昔氏始祖譚であることを証明している。またそこには儒理についての言及がない。儒理には二子がいたとあるが、その子をさし置いて脱解が即位したというのも、如何にも不自然である。そうすると、『国史』では儒理尼師今の存在はなく、「次次雄」の称号もなかった可能性がある。儒理尼師今代の主要記事は、『旧三国史』引用の六部姓記事と『新国史』引用の官十七等の制定である。それに特筆されているのは、「嘉俳」と言われた歌舞百戯と、「会蘇曲」の起源説話であるから、それは必ずしも儒理尼師今代のこととは言えない。脱解に関する具体的な記事もない。これらのことを勘案すると、「解」を共有する南解と脱解は父子関係であって、儒理は新羅の政治制度や民俗をまとめるために、『新国史』が後補した王であったと言える。脱解が海波彼方から漂着したというのも、南解の婿であったというのも、脱解が朴氏ではなく、昔氏であると改変した『新国史』の作業であろう。『国史』では脱解は詭計を用いて梁部の月城を奪い、名実共に新羅王となり、新しく「尼師今」を称したとしていたのであろう。それは梁部に居住した新羅王（寐錦王）と、沙梁部に居住した王弟の葛文王が、新羅六部を支配した5世紀以後の現実を反映した建国神話と言える。『新国史』は脱解の「尼師今」にひかれて、「儒理尼師今」としたと思われる。金氏の始祖王は13代末鄒尼師今で、12代沾解尼師今に嗣子がなかったため、昔氏に婿入りして即位したとある。末鄒にも嗣子がなかったため、王統は昔氏の儒礼・基臨・訖解に移ったが、訖解にも嗣子がなく、末鄒王弟末仇の子の奈勿が末鄒の婿、実聖

を末鄒王弟大西知角干の子（『遺事』）で、末鄒の婿とすることで、実在の確実な両王の正当性を唱えたものと思われる。昔姓を無視すれば、それは『国史』の王統を反映している可能性がある。奈勿の何代前の王は実在の人物であったことも考えられるが、異斯夫が「奈勿王四世孫」、居柒夫が「奈勿王五世孫」、宣徳王が「奈勿王十世孫」、元聖王が「奈勿王十二世孫」などによれば、確実な初期の王は奈勿であったことがうかがえる。『新国史』は、朴昔始祖神話を創作したので、それより権威のある金氏始祖神話をも搜索したことは当然のことである。それは脱解尼師今九年春三月条にある。それによると、金氏始祖閼智が金の箱に座して始林（鷄林）に降臨したとある。閼智から数えて末鄒は七世孫、奈勿は八世孫である。ところが、閼智の名は新羅時代にはどこにもみえず、682年（神文王二年）の『文武王陵碑』をはじめ、後期新羅の金石文には、始祖の「星漢」が祥林（始林）に金輿に座して降臨したと伝え、その「星漢」は閼智の子の勢漢に一致している。すなわち、閼智は高麗時代の『旧三国史』で架上されたのである。また『文武王陵碑』によれば、星漢は中国の三皇五帝伝説に繋がる小昊金天氏の後裔を標榜して、朴昔姓を凌ぐ権威を獲得していたのである。

『新国史』は始祖王を朴氏としたことで、6・7世紀の王妃は朴氏として、同姓近親婚を隠蔽したが、これでは実体のない朴氏の存在が大きくなりすぎて、その後の朴氏の処理に問題が生ずるため、中間に昔氏王統をたて、朴氏の影を薄めたのであろう。『国史』では金氏王統で一貫していたのである。

第Ⅱ章 倭人・倭兵関係記事

新羅本紀には倭人・倭兵記事が頻出する。最初は早くも①第2代南解次次雄十一年条で、

「倭人遣兵船百余艘、掠海辺民戸。発六部勁兵以禦之」とある。

以下、注目されるのは、

②脱解尼師今十七年条、「倭人侵木出島。王遣角干羽鳥禦之、不克。羽鳥死之」。

③助賁尼師今三年四月、「倭人猝至圍金城」。および四年秋七月、「伊滄于老与倭人戰沙道。乘風縱火焚舟。賊赴水死盡」。

④儒礼尼師今十一年夏条、「倭兵来攻長峯城、不克」。

⑤訖解尼師今三十七年条、「倭兵猝至風島、抄掠編戸。又進圍金城、急攻。王欲出兵相戰」。

⑥奈勿尼師今九年夏四月条、「倭兵大至。王聞之、恐不可敵。造草偶人数千、衣衣持兵、列立吐含山下。伏勇士一千於斧峴東原。倭人恃衆直進。伏發擊其不意。倭人大敗走、追擊殺之幾盡」。および三十八年夏五月条、「倭人来圍金城、五日不解。将士皆請出戰。王曰、今賊棄舟深入。……遣歩兵一千、追於独山、挾擊大敗之。殺獲甚衆」。

⑦慈悲麻立干五年夏五月条、「倭人襲破活開城、虜人一千而去」。および六年春二月条、「倭人侵畝良城、不克而去。王命伐智・德智、領兵伏候於路、要擊大敗之。王以倭人屢侵疆場、縁辺築二城」。

⑧昭知麻立干十五年秋七月条、「置臨海・長嶺二鎮、以備倭賊」の記事である。

記事順に出る木出島・長峯城・風島・斧峴・独山・活開城・臨海・長嶺は、「地分」に該当年の位置にみえるので、それらは『新国史』を典拠とすることが確かであるからである。③は昔于老記事であるが、沙道は「地分」に見えない。昔于老については別に昔于老伝があり、内容が複雑で混乱しているので、詳細は後述する。463年の⑦畝良は、現在の梁山で、東北に慶州の金城に直結し、南には釜山に通じ、西には洛東江を渡って金海に達する要地で、未詳地ではないので、「地分」にないのは当然で、『新国史』の

重要記事と判断される。⑦は連年の一連記事で、位置も他の場合とは区別されるので、後述のように、年代の遅れる⑧と共に一応信頼が置ける。それを除けば、倭人は船に乗って孤島を襲撃したが、やがて首都の金城を攻撃している。その場合、⑥吐含山と、実聖尼師今四年夏四月条、訖祇麻立干夏四月条の倭人明活城攻撃記事を勘案すると、倭人は東海辺に上陸し、吐含山・明活城・金城のコースを取って、金城を襲ったと判断される。とすると、慶州市甘浦邑から金城までは甘浦街道が利用されたと思われるが、甘浦の当時の状況が不明であるだけでなく、なによりも船が露出する危険性があった。そこで甘浦南方の大鐘川が利用されたい。大鐘川河口付近には、7世紀後半の文武王の遺言により、文武王海中陵と感恩寺が、倭兵を鎮圧するために建設された。大鐘川は満潮時には水量が増え、感恩寺が浸水する程であった（『遺事』）ので、船は満潮に乗れば上流まで達した。そこで船を隠匿し、上陸して甘浦街道に入り、慶州東部の山間の隘路を隠密裏に通って、金城に直行したと考えられる。これら倭人は海賊的行動を取っているが、文武王時代には、新羅は唐と連合し、663年には白江戦闘で百濟復興軍・倭軍を破り、668年には高句麗を滅亡させ、翌年からは唐と対決した。このような時に、東海の倭人を警戒したのはなぜであろうか。『史記』には5世紀後半以後、倭人侵入記事がないのである。そうすると、奈勿以前の倭人侵入記事は、年次が繰り下げられている可能性があるが、それについては後述する。新羅王として最初に確認できるのは奈勿麻立干である。

『史記』の最大の謎とも言えるのは、『広開土王碑』に刻記された大事件を、完全に無視していることである。高句麗広開土王は、396年に南方の主敵百濟を一蹴し、百濟阿莘王を高句麗「奴客」の誓いをたてさせ、百濟北方の多くの領土を奪った。これより先の百濟近肖古王は、

任那加羅に通じたうえ、高句麗戦に勝利し、高句麗故国壤王を戦死させたことが、その前史にある。阿莘王は397年に太子腆支を倭国に派遣し、百済が滅亡すれば、高句麗・新羅軍が倭国を攻めるだろうと言い、百済・任那加羅・倭国の対高句麗・新羅連合を結成することに成功した。そこで百済の高句麗攻撃、任那加羅・倭国の新羅攻撃が計画された。任那加羅については後述するが、倭国の敗残兵が「任那加羅従拔城」に逃げ込んだことから、任那加羅の参戦は疑問の余地がない。百済の高句麗攻撃が整わなかったなかで、任那加羅・倭国は399年に新羅に攻め入ったが、新羅奈勿麻立干の救援要請を受けた広開土王は、400年に歩騎5万を派遣して、新羅を救い、侵入兵を追って任那加羅従拔城を占領した。この結果、奈勿は高句麗に朝貢し、「寐錦」の称号を授けられた。しかし東アジアの国際戦争ともいべきこの事件は、『史記』では一切黙殺され、ただ高句麗・百済戦と新羅の高句麗への実聖入質ということだけを記録している、高句麗長寿王は427年に平壤に遷都して南進政策をさらに進めたが、その頃に建立された『中原高句麗碑』には、「新羅寐錦」が「東夷寐錦」として、「高麗大王」に親朝し、高句麗軍が新羅領内で活動していることを明記している。そのことも『史記』は無視している。これをどう解釈するかである。

ここでまず問題とするべきは、『広開土王碑』の「任那加羅従拔城」の位置である。前稿ですでに論じたように、任那加羅は金海の加羅を盟主として、東は釜山東萊の居柴山国、西は昌原一帯の卓淳・喙己舌を含む政治的連合体である。加羅王は連合の盟主として、滅亡時まで任那加羅王とも称された。5世紀に高霊加羅が台頭して南加羅王となった時も同様であった。問題の従拔城は東萊の北部に位置し、400年以後、新羅は梁山を南部戦略基地、従拔城をその前哨基地とするようになったのである。ゆえに、そ

れまでの新羅の主敵は任那加羅の居柴山国であった。ところが後述のように、居道伝には、新羅の居道が1世紀の脱解尼師今代に、「張吐之野」で詭計を用いて居柴山国と于尸山国を一挙に滅ぼしたとある。「張」は「従」と音通、「吐」と「拔」は訓通であるから、「張吐」と「従拔」は同地である。居道は5世紀の人物であった。

居柴山国の滅亡年は定かでないが、東萊福泉洞古墳群などの内容から、5世紀中葉と推定される。居道の居柴山国討滅はこの時期なのである。これが1世紀に遡上されたので、居柴山国が絡む高句麗の新羅救援戦、ひいては新羅の高句麗への従属化は抹殺され、一方では、新羅の初期から「加耶」や百済と戦ったという記事が登場して、均衡を取ったということになる。すると、敵良付近の⑦は463年記事で、位置も金海の加羅（任那加羅）と洛東江対岸になる、新羅の戦略的拠点である。このことから推測すると、居柴山国を併合した新羅が加羅への攻勢を強めたので、陽動作戦として、倭国と強い関係があった加羅が、倭人をも組織して梁山を襲撃した可能性が考えられる。前年の活開城襲撃と「虜人一千」も同じ文脈で理解される。⑧は「臨海鎮」の名からすると、新羅が⑦のような加羅・倭国の動きに対応して、南海岸地帯に築城した記事であろう。

第三章 新羅の小国統合記事

「地分」317・318には、他の新羅地名と区別されて、「張吐野」・「絶影山」の二地名が記載されている。この二地名は列伝にだけみえること、とくに「絶影山」は『行録』を原典とする金庾信伝にあるから、二地名の原典は、なんらかの伝記本であると考えられがちであるが、決してそうではない。列伝には未詳であることの確実な地名が少なくないが、それらは一般的に摘記されていない。金庾信伝にも多いが記載されて

いない。この二地名は同一原典に拠るに相違なく、それを追求するため居道伝から検討する。

- ① 居道、失其族姓、不知何所人也。仕脱解尼師今為干。時、于尸山国・居柴山国介鄰境、頗為国患。居道為辺官、潛懷并呑之志、每年一度羣馬於張吐之野、使兵士騎之、馳走以為戲樂。時人稱為馬叔。兩国人習見之、以為新羅常事、不以為怪。於是起兵馬、擊其不意、以滅二国。

この記事は、居道が脱解尼師今代に「張吐之野」で、馬戲を毎年行って、敵の油断を誘って急撃し、于尸山国と居柴山国を併呑した内容であるが、記述のように、これは5世紀中後葉の事を1世紀に遡上させたものであり、本紀には対応記事がない。

- ② 異斯夫（分注。或云苔宗）、姓金氏、奈勿王四世孫。智度路王時為沿辺官。襲居道権謀、以馬戲誤加耶（分注。或云加羅）国、取之。（後略）。

異斯夫伝は「襲居道権謀」で分かるように、居道伝と一連の史料に拠っている。後略部分は本紀と対応し、事件ごとに「十三年壬辰」、「真興王在位十一年、大宝元年」と年次を明確にしているが、「智度路王時」以下は本紀にない。異斯夫が滅ぼしたのは南加羅とも任那加羅とも言われた金海一体で、年次は「法興王時」の532年が正確である。②の分注は、本来は「南加羅」あるいは「任那加羅」で、それを②の原典か、『史記』が単に「加羅」とし、さらに『史記』が本文を「加耶」と変えたと思われる。そのため、『新国史』の真興王紀の「加耶」（事実は「加羅」）討伐事件と矛盾するようになり、それを解決するため。「加耶叛」を加えたと言えよう（後述）。年次の誤りの理由には明答がないが、居道の年次繰り上げと関連して生じたものではなからうか。「智度路王」も諱で、脱解が諱であるのに対応するかのようである。本紀には智証麻立干の諱は智大路で、分注に智度

路とあるのは、『史記』編者がこの史料を見て付したものである。そうすると、この史料は『新国史』が利用しただけでなく、『史記』当時にも現存していたのである。「地分で」「張吐野」に続く「絶影山」は『行録』に8世紀の記事中にみえるが、それが原典ではなく、異斯夫史料に出るもので、異斯夫伝には、ただ「襲居道権謀、以馬戲誤加耶」とあるだけであるが、原史料には絶影山の馬を使って、南加羅を油断させたとあったのであって、詳細な部分は省略されたが、『史記』は原史料から地名を摘記したのである。絶影山は、『東国輿地勝覽』東萊県条に、「絶影島、在東平県南八里、有牧场」の記事から分かるように、現在の釜山湾影島である。したがって、居道が釜山の居柴山国を征服したので、異斯夫は絶影山の馬を手に入れたということになる。

- ③ 斯多含、（中略）、真興王命伊濱異斯夫襲加羅（分注。一作加耶）国。時斯多含年十五六、請從軍。王以幼少不許。其請勤而志確。遂命為貴幢裨將。其徒從之者亦衆。及抵其国界。請於元帥、領麾下兵、先入旆檀梁（分注。旆檀梁城門名、加羅語謂門為梁云）。其国人不意兵猝至、驚動不能禦。大兵乘之、遂滅其国、（下略）。

関連記事は、真興王紀二十三年九月条に、「加耶叛。王命異斯夫討之。斯多含副之。斯多含領五千騎、先馳入旆檀門、立白旗。城中恐懼、不知所為。異斯夫引兵臨之、一時盡降。論功、斯多含為最。（後略）」とある。これは562年の加羅討伐記事であるが、斯多含伝の分注「一作加耶」は、異斯夫伝の「加羅」を「加耶」と改変したためで、それに伴って「加耶叛」が加えられた。斯多含伝と本紀には無視できない相違があり、斯多含伝は異斯夫伝と一連の史料に拠ったということになる。

「加羅」は昔于老記事にも出ている。奈解尼師今十四年秋七月条、「浦上八国謀侵加羅。加

羅王子来請救。王命太子于老与伊伐浪利音、将六部兵、往救之。擊殺八国將軍、奪所虜六千人、還之」がそれであるが、疑問が多く、次の列伝記事にはみえない。

- ④ 昔于老、奈解尼師今之子（或云角干水老之子）。助賁王二年七月、以伊瀆為大將軍、出討甘文国破之、以其地為郡県。四年七月、倭人来攻、于老逆戰於沙道、乘風縱火、焚賊戰艦、賊溺死且尽盡。十五年正月、進為舒弗耶、兼知兵馬事。十六年、高句麗侵北辺、出擊之不克、退馬頭柵、（中略）。沾解王在位、沙梁伐国旧属我、忽背而帰百濟。于老将兵往討滅之。七年癸酉、倭国使臣葛那古在館（下略。于老死亡記事）。未鄒王時、倭国大臣来聘、（下略）。

浦上八国・加羅救援記事は奈解尼師今代の唯一の于老記事で、同王代に活躍したのは主に利音である。利音は官位第一の伊伐浪であるから、浦上八国事件の主人公は利音が正しく、「太子于老」は後の付加である。この記事で問題は「加羅」である。浦上八国事件に関しては別に勿稽子伝がある。

- ⑤ 勿稽子、奈解尼師今時人也。（中略）。時八浦上国同謀伐阿羅国、阿羅使来請救。尼師今使王孫捺音率近郡及六部軍往救、遂敗八国兵。是役也、勿稽子有大功。以見憎於王孫、故不記其功。（中略）。後三年、骨浦・柒浦・古史浦三国人、来攻竭火城。王率兵出救、大敗三国之師。勿稽子斬獲數十級。及其論功、又無所得。（下略）。

本紀の浦上八国事件と⑤は同時代の同一事件であるが、主人公が異なり、「加羅」は「阿羅」になっている。注目されるのは④下線部分と⑤が王代記事で、年次がないことである。これは①・②・③通有の特徴で、一連の史料を典拠にしていることを暗示している。于老の「加羅」

救援記事は、捺音と利音を同一人物として、さらに于老を加えて『新国史』が造文したが、勿稽子伝は一連の史料に拠ると思われるが、それにも疑問がある。なぜなら咸安に存在した阿羅が新羅に救援を求めたという事態は、考えがたいからである。阿羅と新羅は一貫して敵対関係にあったからである。本紀の加羅が新羅に救援を求めたというのも同様である。これを合理的に解釈すれば、新羅が加羅を併合したのち、危機感を抱いた浦上八国が新羅を攻撃したということにしかならない。勿稽子伝の「阿羅」は「加羅」とみるべきであろう。

④は本文と基本的に対応するが、下線部分以下はそうでない。沾解尼師今紀には沙梁伐国討滅記事はなく、「三年夏四月、倭人殺舒弗耶于老」とあって、死亡年も異なる。下線部分は王代だけを記す記事で、やはり一連の史料に拠ったと考えられる。年次が明記されている記事も、『新国史』が于老史料から、年次を適当に配置した疑いもある。「奈解尼師今」としながら、「助賁尼師今」ではなく「助賁王」とあるのも、それを裏付ける。于老史料には甘文国・沙梁伐国統合記事があったのではなからうか。

于老については死亡年の問題が残る。昔于老伝の于老死亡記事は、大略次の通りである。

「七年癸酉」。倭国使臣葛那古を于老が接待した時、戯れに、早晚倭王を新羅の塩奴とし、王妃を炊事婦にするであろうと言った。倭王が怒り、將軍于道朱君を派遣して新羅を討とうとしたので、新羅王は于柚村に出許した。于老が不慎の言を詫びたが、倭人は許さず、于老を焼殺した。「未鄒王時」、「倭国大臣来聘」の際、于老の妻が大臣を泥酔させたのち、庭に曳き下ろして焚殺し、前怨を報いたが、怒った倭人が金城に来攻した。

この内容には疑問が多い。まず、「倭国使臣」、「倭国大臣」の新羅訪問を必須の条件としているが、それは新羅・倭間で使節が往来する

ようになった時、それも反倭的感情が強かった頃に成立した説話であると推測される。『日本書紀』によれば、575年の敏達四年以後、外交担当の吉士集団がしきりに新羅に派遣されているが、それは多々羅・須奈羅・倭陀・発鬼四邑をめぐる紛争と関連していて、その対立関係は617年の推古十八年まで続いた。于老焼殺記事はこの頃に成立したと考えられ、5世紀に倭国で焼殺されたという、朴提上事件の影響も推定される。そうすると、于老は6世紀末頃の人物で、沙道で倭人と戦って勝利したというのも同時期の事とも受け取れる。次に、「七年癸酉」と死亡記事の「未鄒王時」である。後者は王代だけであるが、前者は本紀と異なる年次を明示し、それに異例の干支が付されていることである。七年が癸酉年であることに違いはないが、年次がなぜそうなったのかは難問である。妻の復讐記事も「未鄒王時」とあるのが無視できない。④は沾解尼師今代に沙梁伐国を討ったとあるので、どこかの段階で数年を置いて「七年癸酉」を加えたと思われ、原文は「時倭国使臣」のようであったのではなかろうか。于老記事も一連の小国統合史料であったと推測したい。

于老は甘文国・沙梁伐国を討ち、高句麗と倭人と戦った。甘文国は慶尚北道金泉で、後期加羅が存在した高霊の東北方、沙梁伐国は金泉の北方である。新羅の戦略は、釜山東萊から金海、そこから咸安・高霊を併合したのち、高霊を北上して金泉・尚州へと向かい、慶尚道を統合したことになる。するとそれは6世紀のことになる。対高句麗戦もそれにふさわしい。そうすると、対倭人戦と于老死亡もその頃の事件と考えられるであろう。

于老記事と681年頃の文武王海中陵・感恩寺からは、倭人記事の中でも、初期の金城侵入記

事などは600年前後の事件の遡上ではないかという疑問を抱かせる。当時、新羅は高句麗・百済と激戦を交えていたので、その隙を突いて倭人海賊が金城まで侵入したのではなかろうか。確たる証拠はない状況判断であるが、そうでないと文武王陵・感恩寺と倭人の関係が解けない。この倭人がただの海賊であるか、倭王権が背後にあったかは、判断できない。

第IV章 新羅の対高句麗記事

新羅史は、『三国志』に記載された辰韓十二国の一国、現在の慶州に存在した斯盧国に起源する。377年に高句麗と共に前秦に入貢し⁵、382年にも「新羅国王楼寒」の名で入貢している⁶。「楼寒」は「麻立干」の対訳で、この時点では「王」号を称しておらず、この「王」は奈勿麻立干のことである。それでも奈勿麻立干は『広開土王碑』では「新羅寐錦」と言われているから、間もなく「新羅」という国号が定まったのである。新羅の前秦入貢は高句麗に導かれたものであろうから、新羅は高句麗の保護下にあったと言えるが、この関係は高句麗勢力が江原道まで及んでいたことが前提になるはずである。399年の倭人襲来に際しては、高句麗の救援を受けた。高句麗は417年の訥祗王即位に関与し、5世紀の『中原高句麗碑』には、新羅寐錦は「東夷寐錦」として高句麗に親朝し、新羅領内には「新羅土内幢主」が高句麗から派遣されている。それまでの新羅史に関しては『史記』に多くの高句麗関係記事があるが、疑問が多い。3世紀の助賁尼師今十六年冬十月条に、「高句麗北辺。于老将兵出撃之、不克、退保馬頭柵」とあり、「馬頭柵」は「地分」に記載されているから、それは『新国史』に拠る記事で

⁵ 『資治通鑑』晋紀・大元二年条。

で引用した『秦書』の逸文。

⁶ 『太平御覧』卷七百八十一・四夷部二・東夷二・新羅

あるが、事実としてはあり得ないという好例である。

慶州では、壺杆塚から415年銘の高句麗広開土王青銅盆が、瑞鳳塚から451年銘の高句麗銀盆杆が出土しており、新羅の一貫した対高句麗友好政策を示している。その一方で、400年の広開土王の救援後、釜山東萊の居柴山国北部の従拔城を確保して以来、倭国と歴史的に関係があった居柴山国に浸透して、倭国の各地と交流し、確実に国力を強化した⁷。4世紀以来、慶州の主要墓となった積石木槨墓は、高句麗の影響を受けたと考えられているが、5世紀中葉の皇南大塚は新羅最大の古墳で、豪華華麗な副葬品が埋納された。この頃に居柴山国を統合し、西に洛東江沿岸に達した。ところが、北部では高句麗が小白山脈を越えて新羅領内の支配を強めていた。『史記』地理志によれば、「本高句麗県」などとされた地域があり、それは迎日湾付近の興海にまで至っている。江原道には「本高句麗」の地の記載がないので、江原道はすでに高句麗領であったことになる。この地理志の独自の史料は懐疑的にみられていたが、1971年と85年の榮州市順興の壁画古墳の発掘、88年の『蔚珍鳳坪碑』の発見によって、俄然脚光を浴びるようになった。順興の二古墳は、高句麗式の横穴式石室墳で、前者には「乙卯年於宿知述干」の墓誌名、後者には「己未（中）…」の墓誌名があって、595年、538年、あるいは干支一巡下げた年代が推測されている。両古墳には力士像・蓮華・雲・山岳などの壁画が描かれ、前者には青竜・朱雀、高句麗裳の女性、後者には蛇を巻いた男子像があって、高句麗壁画古墳の影響が明白である。524年の甲辰年建立であることが分かる『蔚珍鳳坪碑』の墓誌名には、「居伐牟羅」の「奴人」に下された寐錦王の「教」

が記録されているが、その居伐牟羅とは「本高句麗及伐山郡」で、まさしく順興の地に当たる。「於宿知述干」は新羅の在地有力者であろうから、高句麗は在地新羅の首長などを通じて、支配を進めたことが想像される。榮州市は嶺南の北部であるが、その南方にも同様な高句麗の支配が及び、高句麗の「幢主」も派遣されていたことも想定できる。地理志のこの記録は決して無視できず、新羅は南方・西方に領域を拡張しながらも、北部では危険にさらされていたようにみえる。ただ443年の癸未年銘『迎日冷水碑』によれば、「斯羅喙斯夫智王乃智王」が珍而麻村の節居利に「教」を下し、癸未年にこの二王の「教」に従がって、「沙喙至都盧葛文王」ら七王がその問題を処理したとあるが、斯夫智王・乃智王は実聖王・訥祇王で、珍而麻村は迎日湾近くの冷水里であることから、この時までは高句麗の力が興海にまでは達していなかった。というより、「本高句麗」というのは、どこまでも新羅との同盟関係を阻害するものではなかったので、榮州など北部を除けば、それは高句麗側の形式的な命名に過ぎなかったようである。高句麗は対百濟戦に新羅を動員するため、やがて嶺南地方から撤退し、その機会に新羅は江原道に進出したようである。468年の慈悲麻立干十一年条、「春。高句麗与靺鞨襲北辺悉直城。秋九月、徵何瑟羅人年十五以上、築城於泥河」によると、新羅北境は三陟から江陵にまで達している。高句麗と新羅は戦争状態に陥ったことになるが、同王十三年条、「築三年山城」とあるように、新羅は小白山脈の秋風嶺を越えて忠清道の報恩に進出して、百濟に対していたのである。百濟は高句麗長寿王の攻撃を受け、475年に一時的に滅亡した。ところが、慈悲王

⁷ 申敬澈「加耶遺跡の歴史的位相」慶南發展研究院歴史文化センター、1995年。高田寛太『古墳時代の日朝関

係』吉川弘文館、2014年。

紀にはそれを474年のこととして、「秋七月、高句麗王巨連親率兵攻百濟。百濟王慶遣子文周求援。王出兵救之。未至百濟已陥、慶亦被害」とある。ここに百濟王蓋盧王が子の文周を新羅に派遣して、百濟に救援を求めたとあるが、実は文周は蓋盧王の叔父で、蓋盧王より一代上なのである。そして百濟と新羅は敵対関係にあったのであり、文周は474年に報恩一帯の新羅軍を防ぐため、漢城を出ていたので生き残り、次王になったのである⁸。百濟を滅亡させた高句麗は次の鋒先を新羅に向け、一大攻勢に出たものと思われる。481年の炤知麻立干三年条には次のように述べている。

春二月、幸比列城。三月、高句麗与靺鞨入北辺、取狐鳴等七城、又進軍於彌秩夫。我軍与百濟・加耶援兵、分道禦之。賊敗退。追撃破之泥河西、斬首千余級。

三月条は高句麗・新羅が本格的に戦った記事である。狐鳴城は「地分」1111に出るから、この記事は『新国史』に基づく。「靺鞨」は随・唐代の用語である。「彌秩夫」は興海と共に浦項市北区に属する。「泥河」は江原道江陵北方である。「百濟・加耶援兵」の「百濟」は、慈悲麻立干記事に百濟を救援しようとした記事に対応するもので、史実ではなかろう。高句麗軍は興海まで一挙に進撃したが、事あることを予見していただろう新羅軍に一蹴された。そして間もなく炤知十五年（493年）春三月条、「百濟王牟大遣使請婚。王以伊伐浪比智女送之」によれば、新羅・百濟同盟が成立したのである。さらに551年には百濟と共に高句麗を急襲して南漢江流域を占領、続いて553年には百濟を急襲して漢江下流を奪取し、560年には阿羅を、562年には加羅を併合し、さらに甘文国・沙伐国を統合した。その後は、百濟・高句麗両国の攻勢にあって、困難を経ることになる。

『史記』には早期からの新羅・百濟同盟記事が少なくない。それは481年記事に「春二月、幸比列城」とある造作記事に対応するもので、信頼できない。125年の祇摩尼師今十四年条、「春正月、靺鞨大入北境、殺掠吏民。秋七月、又襲大嶺柵、過於泥河。王移書百濟救。百濟遣五將軍助之。賊聞而退」によれば、新羅は二世紀には小白山脈を越えて、江原道の江陵北方の泥河に達していて、百濟と同盟を結んでいたことになるが、明らかに事実と反する。4世紀の比列忽・何瑟羅支配もそうである。前者は安辺、後者は江陵である。また于老の対高句麗戦記事があるように、高句麗と早くから戦ったと述べているが、5世紀中葉までのこれらの記事は事実ではない。新羅が安辺を支配したのは551年の南漢江流域占領後である。

『新国史』以後の新羅の歴史は、最終的には一応『旧三国史』にまとめられたと思われる。『旧三国史』は、『旧唐書』までの中国史料をも参考にしたが、『史記』は新来の『新唐書』・『資治通鑑』・『冊府元龜』によって、さらに三国史を補充した。

おわりに

『史記』の初期記事はどこまで信頼できるのかは、三国時代研究の根本に関わる。新羅関係記事は、4世紀までは、後世の事件を遡上させたか、造作したものが大部分で、奈勿麻立干代から事実の記事が現れるが、それも対高句麗関係を無視したり、遡上した記事があって、それだけでは史実に接近しがたいという結論を得た。それらの記事の多くが高句麗・百濟と関係するので、その両国記事にも影響を及ぼしていることになる。拙論は『史記』記事をズタズタにした感があり、異見が出ることも当然と考え

⁸ 拙著『古代の朝鮮と日本（倭国）』雄山閣、2007年。

る。新羅関係記事は前著を大きく修正しているが、またそれが鉄案とも言えない。『史記』は

まことに侮れない史書で、継続しての研究が切に望まれる。